

狛諸成の万葉考述作と注釈書

——仙覚抄・代匠記について——

河野頼人

狛諸成は万葉考卷七以下の述作にあたって注釈書とどのように相対しているであろうか。

先ず諸成が万葉研究の先学の業績をどのようにみているかであるが、自己の見解を特に示しているところはない。考卷七序に、

「万葉集の考のはしめに賀茂真淵くはしくかける如摂津の契沖僧山城の荷田東万呂同じ時に在て相問ぬ物から同じ心をおこして古へふりを唱へ僧は古き歌をときしるすわきを新あらたしつれとまだよくもうゑおふしつくさてすきにしとぞ東万呂は哥うたのみかはふりぬるよの書等あらずきかへせしいたつききはなれとも炬をさめはてさるにやまひにふしつと……」(増訂賀茂真淵)

といているのであるが、「万葉集の考のはしめに」とある如く、「万葉集大考の「哥を解こと」をほぼ同文で引いているのであって諸成の見解そのものではない。

私は、南炎文庫旧蔵万葉考(以下南本)の書入を資料に「狛諸成の万葉考増訂の方法をめぐって」(万葉五)なる小文を記し、諸成が考述作にあたって参照した注釈書は代匠記以外なかったのではないかといつたのであるが、小稿では右書入及び全集本(以下考)所引の諸説を資料に、諸成と仙覚抄・代匠記との関係について少し具体的にふれて

みたい。猶、書入が考に先行していることは右の小文でふれたのでくり返さない。

そして、諸成は南本書入に仙覚抄を引いているのではあるが、仙覚説を「顕昭云」と書入れたたり「奥儀抄」の説として引いたりしていることなどから、諸成は果してそれを仙覚抄として研究史上の位置など認識していたか疑わしいと臆測したのであったが、小稿では、書入の仙覚抄引用の形が概ね次の二つに大別出来ることからみていこう。

その一は、南本の注本文を本に仙覚抄を従の立場で書入れているもの。これには当然ながら注本文を改める如き発展は考えられない。注本文は考にいたっても同文である。例えば、

○卷十(七)の351「顕昭ゆふの山を豊あま前まへいへるハ誤なり下の風土記にてしれ」

は注本文所引の豊後風土記をうけて書入れられている。又、

○卷七(考)の1170「顕昭もなみくら山近江国といへり」

とある書入は、注本文「佐左浪乃。△近江国のうちの大名也其名の地々にはみな冠らせつる也▽連つら山やま爾。……」(全集卷二)をうけての「顕昭も」である。仙覚抄を引きながら、重んじているとはみ

えない。
その二は、仙覚抄を肯定的に書入れてはいるが、考にいたっても注のないもの。

○巻七の132「頭昭石と金との説と磐之根両説とをあげて磐之根に
よりしはよし」

と書入があるが、考には「石金之。擬木敷山爾。」(全集卷二の)と傍訓あるのみ。仙覚抄「……磐ノ根ト尺センコトハ、別ノ風流ナク、スナナル義ナルヘシ。」(仙覚全集)とあるのをさしているのであるが考に注がないのは、諸成は書入れたものの「石金」を「磐が根」の借訓とみることは自明として考に注を書き加えるだけの意義を認めなかったのか。因みに、考の卷三(四)の訓「磐金之。ノ磐の根なり。擬木敷山乎。」(全集卷三)とあるので、真淵は卷三の方に早く注を加え(明和初頭までの真淵は流布の巻序)ここにはなかったであろうが、改められた巻序に従って考の述作をしている諸成としては注を加えずとすればこの歌にあるべきか。別は真淵の注であろう。

如上の書入の形から、諸成は書入の段階に於いて仙覚抄を積極的に取入れていこうという意志はなかった——何となれば、その一は、諸成が真淵草稿を認むにあたっての心算えにしようとする程のものでそれ以上のものではなく、その二に於いても亦、仙覚抄を「よし」としながら考に書加えることなく、述作にあたって諸成は、一応注釈書の古いものを手近なところから見直そうという程度であったということが出来るのではなからうか。それに書入れられた仙覚説が諸成の述作に直接働きかけているものないことを付加えておきたい。

ところで次の一例であるが、諸成は卷十の189「吾屋前之。毛桃之

と脱字・誤字等に対する考察の不足をいっている。これらは諸成が、彼なりに目の前の仙覚抄の本質をつかみ批判しているといえると思うのであるが、187についていえば、考に「今本佐宿木とありてさねきと訓たれとよしもなし……おもふに草の手の作業を作宿木と見三字とは誤りつらん……」(全集卷二)とある。この書入は先のその一の例ということが出来るのである。因みに、万葉集問目に真淵は「佐旧楽」の誤りといっている(増補本居宣長全集)。

諸成は、この書入の作業から新しく生み出すようなものを得ることとはなかったであろう。

次に考卷七以下の仙覚説についてふれよう。仙覚の名を明記して引かれたものは十一例、そのうち諸成の引用といえるのは、

○卷四(三)の163「諸成猶案るに今本沫緒とあるは淡の緒にてはなきか沫と淡の草の手似たれは仙覚なと校合の時字を誤りしならん……」(全集卷三)

が一例のみであるが、漠然と仙覚の校合について述べたものであって仙覚抄を直接さしてのものではなかった。仙覚抄にはこの歌の注はない。ところでこの仙覚の名と、南本書入に於いて頭昭の名をあげて校合への不信をいっているとは結びついてはいないと思う。万葉集大考の「此集もとは草の手に書つるを、仙覚などや真字となしけん、今ふかく考るにうたがはしき所々、その字を古への草になして見れば、必草より誤れるぞ多き……又あまれる字、もれたることば、或は本のみだれたるを、仙覚が考誤りてあしく書せ、所たがひたるなど多かる中に……」(全集)という批判などを踏まえていると思う。又、南本書入には、卷七の189の如く真淵が仙覚の名をあげて仙覚抄を引いている傍に頭昭の名でもって仙覚抄を引いた

下爾。月夜指。下心吉。再宿頓者」に、
「頭昭云桃ハ花のみあまた咲てミなる事ハ乏き物にせりしかるをけもといへハ実なれる名をあらハす也これをたまさかに思ふ事をとけてミなれるにたとふといへるハよし」
と書入れた。そして考に、

「……諸成案るに宇多豆てふ言は宇は阿留の約多は都良の約豆は都米の約にて則有連積てふ言を約ていふならん……さらばこも下心吉ありつらねつむは相思ふ心の如く相逢事を悦ふ意を桃の突なり月夜のさやかにたとへし哥ならん」(全集卷二)とある。南本右の「諸成案るに」以下がなく、書入後のものであるといえる。さて書入は「たまさかに思ふ事とけて」と平素の鬱悒を散じたというところに共感して「よし」としたのであるうか。しかし考の諸成説は「うたて」に主点がある。そして「相思ふ心の如く相逢事を悦ふ」とあるが、これは真淵の「我おもふ事のまにありて悦ふ意也」とあったのをそのままうけての書加えであろう。これもこのようにみれば諸成には書入の直接の影響はないといえるであろう。

そして上の如き関わりをみせている中について、目立つものは本文批評に関する批判的な例である。例えば、

○卷十の187「頭昭云……佐宿木の花いまだこれをたづねえず……といへるハ古ハ草字なりしを考得ざる也」
といひ、又、

○卷十の197「頭昭脱字心付ざるにや……」
○同の209「……旗荒ハはつ嵐の事とて……」の説をあげしハ誤字に心つかざる也いふにたらず」

例もあつたのである。

そして、結論のみをいえば、考卷七以下には、諸成が仙覚抄から引用した説はないといえると思うのである。

諸成は、南本書入の段階に於いて仙覚抄に接しているのではあつたが、そこからは何もつけるものはなかった。そして考卷七以下述作にあつても仙覚抄をかえりみている形跡はないと思うのである。

猶付加えれば、考卷七以下にある真淵草稿の仙覚説も批判が目立っているのであつて、諸成と仙覚抄とは、考述作に於いては、遂に深い関わりを持つこととはなかったということであると思うのである。

次に契沖説であるが、それは代匠記から得たものであるう。

南本書入には、契沖説は卷九(一)に二例。そして二例とも考の注には関わりはない。一例は、「母山」について、

○卷九の132「契沖云美濃也」

は、考には一応不明として、「近江國高嶋郡より見る山歟」(全集卷五七)とある。又、133の題詞の「大伴卿」に「安万侶なるべし」と契沖説を書入れているが、考には何らふれるところはない(契沖説は同様初稿本であったといえる)。そして右二例の限りに於いては、仙覚説に対するそれと交りはないかと思われるのである。

しかし、考卷十一序をみるに、

「契沖などか説のことさらによろしきはそをよしとして其名をあけたり……」(全集)

とある。この凡例は契沖に限るわけではないであろうが、諸成と代匠記との関係は考に於いてみることが出来ると思う。

考に於ける契沖説をみるに、合計六十一例（うち認容例四十二例、否認例十四例）は注意される数である（小稿ではふれ得ないので、比較例数をあげておく。中説は既にあげた。季時）。ところで諸成の引いた契沖説は一例の認否不明を除いて六例全部否認例となっている。これは契沖説を重んじなかったということではなく、契沖説を否定し名をかかえて自説を述べるという形式からしか諸成説が析出出来ぬことからの必然的な結果かも知れぬが、何ともいえない。

さて全般的にみれば、数量的にも他をぬきんでており、そしてとるべきものは積極的にとっているのみられるのである。

例えば、引用者不明の例であるが、契沖の業績の一つと思われる遊仙窟の影響を指摘したものを、

○巻四の四「契沖云此哥第二第四の哥は皆遊仙窟によれりともさも有へし少恥坐睡則夢見十娘驚覺攪之忽然空守云々またく此意なり……」（全集巻三の二七四頁）

○同の五「契沖か遊仙窟に未曾飲炭暖熱如燒不慮吞刃穿似割といふをもてよめりといふはさもあるへし此比はもはら唐をおもへり」（同の二七四頁）

等引用し、特に五は「此比はもはら唐をおもへり」とある。直接影響あるか否かは別として、或いはこれらが真淵の歌風変遷編構成の一端にあるとするならば、真淵の筆であろうか。又、

○巻四の五「吾衣。人莫著曾。網引為。難波社十乃。手爾者雖。契沖云吾心させる衣なればゆめく他し人にきせ給ひそ心にかなはずはそのわたりの賤男にたびてそが手にはふれさすともといへりしたしみて謙退せるなりといへりしかならんか」（全集巻三の二六六頁）

ことがあがるが、諸成の考述作を支えている主たる方法であった。しかしながら、真淵直門でない為か自分の周辺にある人の説をとるに無批判的なきらいがあり、且つ安易な延約通略説が頻用されているのである。こうみると、先の引用者不明も、断定は出来ぬが、真淵の引いたものとみるべきか。

しかし前掲考卷十一序をみれば、諸成による引用もあつたと思われる。だが述べた如く、書入の状況や諸成の考察の基盤をみる時、諸成によって新たにその価値が認識された契沖説は殆んどなかったといつた方がよいのではないか。そして代匠記をもつて「万葉の初の注」（茶へ）（「逸のきみ賀茂のまかろ問ひ」）「茶へ」（「茶へ」）といひ、又万葉集大考にもいふ如く、万葉研究の先達として私淑している真淵引用のそれを主としてなぞっていると理解したらよいのではなからうか。

以上は紙数に限りがある為仙覚抄と代匠記について述べたのであるが、荷田春満説には直接には関わりあつたところはない。他の源順・北村季吟・菅見抄・荷田在満説との関係についても同断（万葉集）。

の如く、「したしみて」といった、新袍を人に贈るのにそれを「吾衣」というユーモアの中に深い情のこもった点を指摘したものを全面的に引用した例もある。文学としての理解に共感したのである。しかし一方、

○巻十七「同の五」契沖かイクリの神社ありと也といへるは哥の意ともども此宴席にてうたへるにも心づかぬ説にてわらふへし且……」（全集巻三の四九〇頁）

という痛癢なものもある。

上巻の例はことわつた如く引用者不明であるが、ここで諸成引用とはつきりしている例をみることにしよう。

○巻十の288「契沖がうつくしき花をすべてかほ花といふは笑へし此説多かれど取へきなしやことなき御説もて別記に云」（全集巻二の五八頁）

○巻四の58「奥守。島守。契沖は奥津島姫の事也といふそれまでもなく野守山守と同じと中良か云るそよし」（全集巻三の二二二頁）

これらは主君田安宗武や友人藤原中良の説によって契沖説を斥けている（因みに、前者は「別記」に「な」。そして又、

○巻十八の406「於於乎布可米天。左度波世流。「左は発語にて度波世留にて言語をいふ契沖は左方同言にて万度波世流といへど横の通に左方を通す例を見すよりに暫発語とすとあれと諸成按るに左度の約曾にて曾波世流といふを五言にいはんため且は哥の文にきとせると延しか……」（全集巻四の四二二頁）

とあるにわかる如く、諸成は延約通略説に根拠をおいて契沖説を批判している。この二つに分類出来るのである。これらは、旧稿（万葉集）の成立と猪諸成の増訂について「国文学会」二七号「万葉集」の増訂と比較してみた猪諸成の万葉考述「万葉集」二七号「その他」に於いてふれた

略解と考卷七以下述作の関係は、真淵の扱した字間をまとめるという。方向にあつて相補う兄弟関係にあるとみているので別稿を用意した。さて上巻述べて来たことを一応まとめると、南本書入は考に先行しているのであるが、その書入が考卷七以下述作に実を結ぶこととはなかつたと思う。そして代匠記が諸成の利用した唯一の注釈書ではないかと思われるのであるが、それとも結果としては真淵の引用の跡をなぞることが主たる作業になっているのではなからうか。

このことは、かつて諸成の拠つた真淵草稿が明和元々二年初頭以前の研究途上のものではないかと推測して（前掲万葉集）、諸成のものゝ濃くなつていゝのではないかといつたのであるが（前掲国文学会）、注釈書との関わりに於いてはむしろ余り諸成が表われていないといふことがいへるやうであるが、しかしこれも先行の注釈書に関わりを持たぬことによつてより考述作に於いて諸成的なものを濃くしていると思ふべきであると思ふのである。（41・7・31清記）